# 雑感・出雲神話と出雲の国（１）

## ～ スサノヲ伝説 ～

荒井 優（Masaru ARAI）

鳥取看護大学　学長

私は戦後に生まれた団塊の世代である。団塊の世代は『古事記』『日本書紀』について学校の授業で教えられた記憶がない。大学生時代は、記紀神話にかぎらず、「神道」という宗教についての知識はほとんどタブーのような雰囲気だった。私は大学で「宗教学」を専攻していて、キリスト教やユダヤ教、イスラム教、仏教などはかなり深く学んだが、「神道」については教えを受けた記憶がない。

しかし、私も年をとって老い先も短くなった。自分の人生を肯定的に受け入れたいと思う。そして、自分が生まれたこの国を肯定的に受け入れたいと思う。私はいま倉吉に住んでいる。山々が樹々の緑に覆いつくされているこの景色を美しいと思う。田舎に広がる稲作水田が季節の移り変わりとともに色合いを変えていくその景色を美しいと思う。私たちの生活環境を取り巻くこうした景観は、しかし太古から私たちの祖先が長い時間をかけて国づくりしてきたその積み重ねによるものである。

いったい、私たちの祖先はどうしてこんなにも美しい国土開発をしたのだろうか。だれが、どういう勢力が、この国土の礎（いしずえ）を作ったのだろうか。これは、ひじょうに素朴な日本の古代史への関心である。私は歴史学が専門ではない。だから、古代史の本に知識を求めるが、日本の黎明期をわかりやすく紐といてくれる本に出会うことがない。その原因は、どうやら『古事記』『日本書紀』（記紀）の書かれ方にあるようだ。そこには、何かが隠されており、どこかはぐらかされた感覚があとに残る。「これは歴史の改竄だ」と怒りを露わにされる歴史家（あるいは歴史愛好家）もいる。私もその気持ちはとてもよくわかる。日本の歴史の始まりが闇の彼方なのだ。それも人為的に操作された闇なのだ。私は歴史家ではないが、私なりの日本の原初についての（絶望的かもしれないが）イメージをもちたいと思う。それこそ、私が記紀や神社伝承に関心を向ける理由である。

### １．妻木晩田遺跡

米子市淀江にある妻木晩田（むきばんだ）遺跡は 1999 年に国の史跡として指定された。1995 年ゴルフ場の建設計画が発端で発見された、弥生時代後半期の大規模集落跡である。晩田山一帯から北麓の大山町妻木にまでおよぶ広い丘陵地帯に、かつては王の居住地、一般の居住地、王の墓地、倉庫群、生産の場など、約 170 ヘクタールにおよぶスケールの大きな古代国邑（ちなみに、吉野ヶ里遺跡 117 ヘクタール、三内丸山遺跡 40 ヘクタール）が広がっていた。王の墓地には出雲国の特徴である「四隅突出型墳丘墓」があるから、この国邑は出雲国に属する地域だったことがわかる。土床が焦げた製鉄の跡もみつかっていて、鉄製の工具・農具が作られていた[1)]。丘の上の集落からは間近に、美保湾、弓ヶ浜、島根半島、そして日本海を一望することができる。小さな小舟の出入りさえも見通せる絶景である。山の麓に眼を落とせば、現在は平野部一面に緑の稲作水田が広がっている。しかし、この水田は江戸時代に干拓された新田で、それ以前は美保湾につらなる潟だった[2)]。おそらく縄文海進の時代には、日本海が山麓の入り江にまで迫っていたであろう。その後、徐々に海面低下し、弥生時代に

は、入り江は潟として残ったのである。

この古代国邑は、パンフレットによれば、西暦１世紀から４世紀初頭の約 300 年にわたって栄えた集落である。集落内には、竪穴式住居 395 基、掘立柱倉庫 502 基、墳丘墓 24 基が発見されている。最盛時には、約 100 世帯の弥生人たちが住んでいたようである。

大和朝廷のはじまりを西暦 280-290 年頃とすれば[3]、妻木晩田集落の最盛期（２～３世紀）は「国譲り」前の大国主が率いる出雲王国の隆盛期に重なる。そして、「国譲り」によって出雲王朝が滅亡した頃に、この妻木晩田集落も消滅したようである。消失した原因は国の滅亡なのか、それとも邑民の移住なのか、いまは定かではない。

写真１　妻木晩田遺跡から見る美保湾

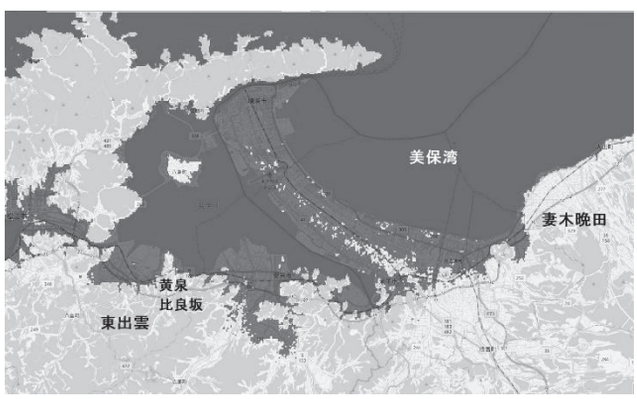


図１　妻木晩田と美保湾（弥生時代を想定）
（「Flood Maps on your Web-Site」[4] により海抜 5m に設定）

## ２．出雲の国

大和朝廷以前に存在したであろう出雲王朝は、いったい西日本のどのくらいの地域を支配していたのであろうか？　その解答は、いまだに古代日本史において定説がない。いや、ないどころか、出雲神話は「神話」（フィクション）であり出雲国など存在しなかったのだという主張が、古代日本の歴史学者のあいだではまだ大半をしめている。

ここでは、史実か作り話かの議論はさておくとして、『古事記』『日本書紀』に記載されたかぎりのこととして、いったい出雲の国はどれほどの領土を支配している国だったのか、ということを探ってみようと思う。もう少し言えば、『古事記』『日本書紀』を書いた奈良時代の為政者たちは、「出雲の国」をどう位置づけていたのかという視点で、出雲国のイメージを浮かび上がらせようと思う。

結論から先に言えば、出雲王朝は出雲を拠点として、隣の伯耆、因幡、播磨、北九州の筑紫（宗像・宇佐）、北陸の越（高志、こし）、そして畿内の大和、紀伊、四国の伊予にまで勢力を広げた盟主国だったというイメージが、『古事記』『日本書紀』や『出雲風土記』『播磨風土記』などから浮かび上がってくる。

古代日本の黎明期、１世紀～３世紀に、出雲族の先祖たちは、日本海を交通路として各地に進出して、未開の原野を開拓した。やがて、西日本の内陸部（畿内・大和）にまで、国土開発（開墾と稲作）を目的として活路を広げていった。それが出雲の国であり、その首長が「大国主（おおくにぬし）」と呼ばれる王だった。出雲の人々からは「大穴牟遅命（おおなむちのみこと）」と言われた人物である。あるいは、「大国主」と「大穴牟遅」はちがう人物であるという説もある。狭義の出雲国の首長が「大穴牟遅」で、西日本の広い地域にまで広がる広義の出雲連合の王が「大国主」である、というとらえ方である。

いずれにせよ、古事記に描かれた「出雲の国」は、いまの島根県の松江から出雲までの地を拠点として、北九州から北陸・新潟、さらには大和にまで拡がる一大文化圏であったように思われる。歴史的には、弥生時代から古墳時代初期のことである。この広域の出雲連合国を、古事記は（「出雲」とは別に）「葦原中国（あしはらのなかつくに）」と言っている、というのが私の理解である。

そして、この「葦原中国」を国土開発し、稲作農耕を広げた先住民（出雲族とその同盟国の民）の指導者たちを、古事記は「国津神（くにつかみ）」という。そして、この「国津神」が国土開発した国々である「葦原中国」を、「国譲り」と称して武力的に奪い取ったのが、「天照大御神」率いる「天津神（あまつかみ）」（いわゆる「天孫族」＝「高天原族」）であり大和朝廷である、というのがいまの私の理解である。

## ３．「出雲神話」をどう読むか

第二次世界大戦後、著名な歴史学者、津田左右吉に代表されるように、『古事記』『日本書紀』に語られている「出雲神話」は、フィクションであり、古代日本史を構成する史料とはみなされなかった。とりわけ、出雲神話は無視され、歴史以前の「神代」の奥座敷に押しやられていた感がある。

しかし、戦後の経済発展から取り残されていたこの山陰地方にも、ようやく都市開発の波がやってきた。1984 年、出雲の農道工事が発端で「荒神谷遺跡」が発見され、銅剣 358 本、銅鐸６個、銅矛 16 本が出土した。それまで全国で出土していた数を優に超える量であった。そして 1996 年、同じく農道工事により「加茂岩倉遺跡」が発見され、銅鐸 39 個が発掘された。さらに米子では 1995 年「妻木晩田遺跡」が発見され、2000 年には出雲大社の境内で直径３メートルを超える心御柱（三本柱）が発見され、古代の社殿が 48mにおよぶ高層建築だったとの古文書記録はけっして絵空事ではないことが確証された。

こうした一連の遺跡発掘が示すことは、出雲には大和朝廷が成立する以前に大きな勢力があったという史実である。21 世紀に入ってようやく、出雲神話はけっして架空の絵空ごとではないという歴史的実感が広がっていった。

京都の哲学者、梅原猛もその一人である。かつて、「出雲神話は大和の神話を出雲に仮託したフィクションである」と主張して出雲の国の存在そのものを疑った梅原猛は、2010 年著『葬られた王朝』のなかで、自説をひるがえして懺悔し、「もう一度出雲神話を考え直し、そしてその神話がどのような内容を持ち、それが考古学などによって裏づけられるかを抜本的に検討しなければならない」[5] と述懐している。

最近、ＮＨＫテレビで「古事記の世界」について親しみやすく紹介する古代日本文学研究者、三浦佑之もまた、「神話」と「歴史」について次のように述べている。「その時代（２、３世紀）に、日本海沿岸の一つの中心としてあった出雲は、ヤマトの勢力に制圧され吸収されていった。その歴史が神話化され、古事記が伝える出雲の繁栄と高天の原による制圧として語られたのが一連の出雲神話であった。……もちろん、描かれている神話のすべてが歴史に対応するというようなことを考えているわけではない。……しかし、……そこには、出雲という世界のある真実が練り込まれていると考えるべきで……」[6]。

出雲神話に語られた物語そのものが史実だとは言わないが、その背後には何らかの史実を反映した断片的かけらのようなものが練り込まれている。そういう視点から、もう一度、『古事記』『日本書紀』、あるいはそれらに準じた史料・伝承にもとづいて、「出雲神話」を読み直してみる、そんな時代に来ているのではないかと思う。

私がここでもくろむのは、スサノヲ・大国主（大穴牟遅）に焦点をあてて、出雲国がどのような国だったのかを少しでも現像化することである。

## ４．須佐之男の命

『古事記』の「出雲神話」に描かれた主人公は誰かといえば、それはスサノヲ（（古事記）須佐之男／（日本書紀）素戔嗚／（風土記）須佐能袁）の命であろう。出雲に国を作り、さらに出雲を拠点として国土開発した最初の人物は、スサノヲとその一族だからである。

私はここで『古事記』や『日本書紀』『出雲風土記』、そして各地の神社伝承などで語られたスサノヲの行動を追ってみようと思う。（ただし、この探索はあくまでも、与えられた限られた資料にもとづいて仮想したイメージであって、これが史実であると確約するものではないことをお断りしておく。）

**（１）八岐大蛇の退治**

『古事記』に語られた「出雲神話」は、スサノヲの「八岐大蛇の退治」からはじまる[7)]。

高天原を追放されたスサノヲは奥出雲の鳥髪山（船通山）に降り立った。その川上で翁と媼が泣いていた。話を聞けば、毎年、高志（越）のヤマタノオロチ（八岐大蛇）がやってきて娘が食われ、今年も最後の娘、稲田姫を差し出さなければならないと言う。オロチは８つの峰と８つの谷におよぶ大蛇で８つの頭と８つの尾をもつ怪物だった。スサノヲはオロチを退治したら稲田姫を娶りたいと申し出る。稲田姫を譲り受けたスサノヲは、八塩折（やしおおり）の酒を仕込んだ酒船をおいて大蛇を待った。やがてオロチがやって来て、８つの頭を８つの酒船に突っ込んで酒を飲み干した。酔いつぶれたオロチをスサノヲは十拳の剣でズタズタに切り殺した。オロチの尾からは素晴らしい太刀、「草薙太刀」が出てきた。後にスサノヲはその不思議な太刀を高天原のアマテラス（（古事記）天照大御神／（日本書紀）天照大神、日神、大日孁貴／（神社）天照皇大神）に献上した。

これが「八岐大蛇」伝説のあらすじである。「八岐大蛇」伝説の舞台となった斐伊川の上流（奥出雲）には、オロチ伝説の伝承がいくつも残っている。

その一つ、稲田姫の生誕地（現在は稲田神社）の近くにある伊賀多気神社（奥出雲町横田）はスサノヲの御子イソタケル（イタケル、五十猛）の命を祀る神社であるが、そこには次のような略記がある[8)]。高天原を追われた素戔嗚尊が新羅の曽尸茂梨（そしもり）の地に行き来した時に御子の五十猛が同行された。その時、五十猛は持っていた樹木の種子を曽尸茂梨には植えず、日本へ持ち帰って、父スサノヲとともに簸之川上にのぼられ、稲田の里で「オロチ」の被害を聞かれた。奥出雲一帯を支配する越のオロチ族の鉄穴流し（砂鉄を採るために山を崩して流す）のために四方の山がはげ山となり、洪水が頻発していた。そこで、スサノヲがオロチ族を退治し、五十猛は新羅から持ち帰った樹木の種子を荒れ山に植樹して治山治水を行った。杉や楠は舟に、桧は家の材料に、薪の木は火で焼くたきぎにすることを民に教えた。その後、五十猛は国中を回って植樹造林をすすめられた。

同じような伝承は、出雲の北山山系にある韓竈神社（からかまじんじゃ）にも残されている。その由緒によれば[9)]、スサノヲは御子五十猛とともに新羅に渡られ、日本に「植林法」を伝えられると同時に「鉄器文化」を開拓されたという。しかも、この地は古くから「産銅地帯」といわれ、「金堀り」にちなんだ地名や自然銅、野タタラ跡が見られると記されている。

これら２つの神社伝承から、私たちはスサノヲ親子の足取りを次のように物語ることができる。スサノヲは息子、五十猛とともに朝鮮半島に渡り、新羅から植林法とタタラ製鉄法を日本へ持ち帰った。このとき出雲の地は、北陸の越からやって来たオロチ族によって牛耳られていた。オロチ族による鉄穴流しのために、四方の山々ははげ山となり、斐伊川は頻繁に洪水が発生していた。スサノヲは奥出雲の里人たちからオロチ族の退治を頼まれた。「八岐大蛇の退治」とは越の支配からの解放であり、同時にタタラ製鉄をめぐる抗争だった。

スサノヲが切り込んだオロチ族の館が、斐伊川流域の樋の郷（現在の木次）にあった。その跡地が斐伊神社であり、その飛び地境内にはオロチの首塚である「八本杉」が立っている[10)]。オロチ族を退治したスサノヲは、斐伊川にそって下流へ逃げ、（久武神社の由緒[11)]によれば）出雲郷出西の「稲城の森」に隠れていた稲田姫と再会し、成功を祝ったという。

**（２）須賀の宮**

オロチ族を退治したスサノヲは、稲田姫を連れて須賀の地に落ち着いた。「『私は、ここに来て、心がすがすがしい』と仰せられて、そこに宮を造って、お住みになった。このため、この地は今でも須賀と呼ばれている」[12)]。

スサノヲが稲田姫とともに住まわれた宮は、いまは奥出雲の大東町須賀にある須我神社として残っている。その東方に御室山（みむろやま、出雲山）があり、その中腹には巨大な磐座の「夫婦岩」がある。

この地に新居を構えたスサノヲは、山々に雲が立ち上る光景をみて、次の歌を詠んだという。

「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を」
（盛んに湧き起こる雲が、八重の垣をめぐらしてくれる。新妻を籠もらせるために、八重垣をめぐらすことよ。あのすばらしい八重垣よ。）

須我神社は日本で最初の和歌発祥の地とされ、この和歌から「出雲」という地名が生まれた。この新居で、スサノヲと稲田姫のあいだに、長男・ヤシマジヌミ（八嶋士奴美）が生まれた。須我神社にはスサノヲと稲田姫と八島野（八嶋士奴美）の親子３人が祀られている[13]。そして、稲田姫の両親をこの宮に呼び寄せ、父親・足名槌をこの地の首長とした。スサノヲはこの須賀の地に拠点をおいて、出雲の国づくりをはじめた。

**（３）スサノヲの八柱御子神**

スサノヲには子どもが８人いたと伝えられている。スサノヲを「牛頭天王」として祀る京都祇園の八坂神社[14]には、スサノヲのほかに妻の稲田姫と彼の八柱御子神が祀られている。八島篠見（八島士奴美ヤシマジヌミ）、五十猛（イソタケル、イタケル）、大屋姫（大屋津姫オオヤツヒメ）、抓津姫（ツマツヒメ）、大年（オオトシ）、宇迦之御魂（ウカノミタマ、稲荷神）、大屋彦（紀伊の伊太祁曾神社[15]によれば五十猛と同一神）、須勢理姫（須世理姫スセリヒメ）の８人である。８人の御子をもつスサノヲ一族が「ますます栄える」という意味の「弥栄（いやさか）」神社が、変音して「八坂（やさか）」神社となったという。「八」は出雲の聖数であった。

スサノヲは稲田姫とのあいだに八嶋士奴美をもうけたが、これとは別の女性、神大市姫（カムオオイチヒメ、大山津見（おおやまつみ）の娘、詳細は不明）とのあいだに、大年と宇迦之御魂[16]をもうけている[17]。

末娘のスセリ姫の母親については、『古事記』にも『出雲風土記』にも記載がなく、不明である。スセリ姫は出雲西の神西湖のほとり（神門郡滑狭郷）に生まれ[18]、いまその地には那売佐神社（なめさじんじゃ）[19]が建っている。彼女は後に大国主と結婚し、スサノヲの王位を大国主に引き継がせている。（出雲国は末子相続が原則であった。）

五十猛、大屋津姫、抓津姫の母親は不明である。（ちなみに、五十猛は別名・大屋彦ともいわれ、大屋津姫の夫だったかもしれないという説がある。そうだとすると、五十猛は、スサノヲにとっては娘婿であり、義理の息子ということになる。）『日本書紀』が報じるところによれば、スサノヲは、３人の御子たち（五十猛、大屋津姫、抓津姫）とともに、朝鮮半島に渡り樹種をもって日本へ帰り、日本の国中にまいて樹木を繁茂させたという[20]。そうだとすれば、五十猛、大屋津姫、抓津姫の３人の御子は、スサノヲが朝鮮半島へ渡る前に、日本のどこかの女性とのあいだにもうけた御子たちであろう。稲田姫と結婚する前の御子たちである。

しかし、スサノヲの御子はこれだけではない。『出雲風土記』には、別に６人の御子がいたことが記されている。意宇（おう）郡大草郷には青幢佐草彦（あおはたさくさひこ）が、島根郡山口郷には都留支彦（つるぎひこ）が、方結（かたえ）郷には国忍別（くにのおしわけ）が、秋鹿（あいか）郡恵曇（えとも）郷には磐坂彦（いわさかひこ）が、多太（ただ）郷には衝杵等乎而留彦（つききとおしるひこ）がそれぞれの地域を治め巡回していたこと、そして、神門（かんど）郡八野郷には八野若姫（やのわかひめ）が住んでいて、大穴持命（オオナムチノミコト、大国主）が（妻のスセリ姫とは別に）通婚していたと報じている[21]。

こうしてみると、スサノヲの御子は少なくとも 13 人はいると思われる。さらに言うなら、もう３

人の姫神を付け加えるべきかもしれない。

スサノヲがアマテラスに会いに高天原へ行ったとき、あわや戦いとなる危機的状況で、スサノヲはアマテラスと「うけい（誓約）」を行った。アマテラスはスサノヲの十握剣を三つに折って、これらから生まれた神が、多紀理（たぎり）姫、市寸島（いちきしま）姫、田寸津（たぎつ）姫の三女神。これは筑紫の宗像大社に祀られている三女神である、と『古事記』は報じている（『日本書紀』では田心（たごり）姫、市杵嶋（いちきしま）姫、湍津（たぎつ）姫）。この三女神はスサノヲの持ち物から生まれたから、スサノヲの姫御子神であるとも報じられている[22]。

この「うけい」神話が何を語ろうとしているのか不思議な話ではあるが、それはさておいて、この三女神を合わせると、スサノヲの御子は16人となる。８男８女（宇迦之御魂は女神とした）。神社伝承をさらに丹念に調べれば、スサノヲの御子がまだ現れてくるかもしれない。

ちなみに、スサノヲの姫君７人のうち４人が、驚いたことに、スサノヲの王位を継いだ大国主の妻となっている。正妻が須世理姫、異母姉妹の八野若姫は側室、宗像族の多紀理姫[23]、田寸津姫[24]の姉妹もまた大国主の側室となっている。宗像の２姉妹は北九州の宗像族（北九州から朝鮮半島のあいだの海路を支配していた海の民）を懐柔するための政略結婚であったと考えられる。

## ５．スサノヲ一族の国づくり

### （１）スサノヲの出生地

スサノヲがどこで生まれたのかという疑問をもつが、『古事記』によれば、スサノヲは、アマテラス・ツクヨミ（月読）とともに、父、伊弉諾（イザナギ）による日向の阿波岐原での禊ぎ祓いから生まれたことになっている。そして、父から「海原を治めるように」と命じられたが、スサノヲはそれにしたがわなかったために、高天原を追放されて出雲に下った。そうだとすれば、神話におけるスサノヲの出身地はアマテラス・ツクヨミと同じ高天原だということになる。（高天原はどこかという問いにたいして、北九州説、近畿説、朝鮮半島説、天上界説、中国説などがあるが、ここでは深入りしない。私は北九州にあったと考えている。）

記紀神話とは別に、ある神社伝承によれば、スサノヲは出雲の沼田郷（現在の平田市塩津町）で生まれたという[25]。スサノヲの父が母とともに新羅から沼田郷に上陸し、そこでスサノヲを産んだと言い伝えられている。スサノヲの両親は朝鮮半島から渡ってきた避難民だったようだ。その地に建つ宇美神社（現在の石上神社）には、スサノヲの父が「布都御魂（フツノミタマ）」として祀られている。

ところで、スサノヲの両親かと思われるような夫婦の伝説が韓国慶尚北道にある[26]。新羅の海辺にヨノランとセオニョという名の夫婦がいた。海草をとっていたヨノランが近くの岩に乗ると、岩は動き出して日本の出雲についた。一人残された妻のセオニョは夫を探しに海へ出ると、そこに大きな岩があった。その岩に乗ると岩は動き出して出雲についた。二人は出雲で再会し、ヨノランは人々に鉄づくりと米づくりを教え、セオニョは織物を教えて、出雲の国を豊かにした。伝説の地、慶尚北道の浦項（ポハン）には夫婦の銅像が立っているという。

新羅の伝説の夫婦がスサノヲの両親かどうかは、さておくとして、スサノヲの両親が新羅から出雲へやってきたという話は史実的には充分にありえることだと思う。

スサノヲの青少年時代とおぼしき痕跡が、やはり平田の地にある。平田の西、宇迦山系に鼻高山（昔は「熊成峯」[27]といわれていた）があり、その南麓に来阪神社（くるさかじんじゃ）がある。その境内に、若きスサノヲが座ったと伝えられる腰掛岩がある。この岩のうえから、スサノヲはたびたび眼下に広がる出雲平野を眺めたと言い伝えられている。

ちなみに、スサノヲが人生の最後に「熊成峯（くまなりのたけ）」に退いたと『日本書紀』に記されているが[28]、この「熊成峯」とは、通説の紀伊国・熊野ではなく、出雲のこの宇迦山にある熊成峯であろうと私は考えている。そして、「熊成峯」に退いたということは、ここがスサノヲの終焉の地であることを意味する。

スサノヲは出雲の東部に１つの政庁・須我神社（松江から約 10 ㎞離れた山間部）をおき、西部にもう１つの政庁・須佐神社（出雲平野から約 10 ㎞離れた山間部）をおいて国づくりをした。そして、大国主に王位を譲ったあとは、「熊成峯」に引きこもり、ここで亡くなられた。スサノヲの御陵（埋葬地）が、須我神社から八雲山を挟んで反対側にある熊野大社であろうと、私は考えている。

### （２）スサノヲ親子の朝鮮半島往来

成人後のスサノヲが行った最初の活動は、先述した朝鮮半島への往来である。

『日本書紀』によれば[29]、高天原を追われたスサノヲは「韓郷の島には金銀がある」と言って、たくさんの樹木の種をもって３人の御子とともに新羅に渡った。しかし、「この地には居たくない」と言って、樹種を日本に持ち帰り、結局３人の御子たち（五十猛、妹の大屋津姫と抓津姫）が「筑紫からはじめて大八洲の国の中に播きふやして、全部青山にしてしまわれた」。そして、この３人の御子たちは最後には紀伊国へ行き、そこでお亡くなりになった、と『日本書紀』は報じている。

このときのスサノヲと３人の御子たちの行き先とそのルートについて、各地の神社伝承を探りながら、たどってみることにしよう。ただし、弥生時代後半、１世紀～３世紀頃の交通手段は、海路、または河川を利用した手こぎの刳り舟による移動だったことを忘れてはならない。日本の内陸はまだ獣道しかなく、河川から河川へと舟を曳きながらの移動だったはずである[30]。また海岸沿いの平野部は、今は大都市となっているが、弥生時代当時は（縄文海進跡の）湿地帯か内海・入り江・潟だったはずである。

山口県萩市の東側に須佐湾がある。湾から突出した半島部に高山（こうやま、神山）があり、昔から航海の目印とされた山だそうである。そして、スサノヲが出雲から朝鮮半島（新羅）へ渡るときに、高山の山頂に登って朝鮮半島を遠望されたとの言い伝えがある。そのために、この地域は「須佐」と名づけられたという[31]。ただし、実際にスサノヲが新羅へ舟出した港はここではなく、もっと西の、おそらくは筑紫の宗像大社あたりから朝鮮半島へ渡ったと思われる。なぜなら、手漕ぎの舟の場合、日本から朝鮮半島への渡海は対馬海流にのって北上するルートしかなかったからである[32]。出雲を出て、大田、浜田、須佐（萩）、油谷（長門）、宗像（博多）、そして壱岐の島を経由して、対馬から新羅の金海（釜山）というコースである。おそらく最短でも８日はかかったであろう。

新羅に着いたスサノヲ父子は、しかし新羅に定住することを嫌い、植林技術と製鉄技術をもって日本へ戻ってきた。そのとき、新羅から日本へ帰るコースはどのような海路を通ったのだろうか。

１つには、往路と同じく、対馬を経由して博多から逆に帰るコースがある。他の１つは、朝鮮半島の東側から舟を出して（リマン海流にのって）南下すると、やがて日本海沿岸に沿って北上する対馬海流に乗る。あとは風と潮流にまかせれば、島根半島か丹後半島か能登半島のいずれかに引っかかる。漕がずとも、数日か十数日で日本に上陸する[33]。

スサノヲ一族はどちらのコースで日本へ戻ってきたのだろうか？　『日本書紀』には、（改めて引用するが）「韓地には植えないで、すべて持ち帰って筑紫からはじめて、大八洲の国の中に播きふやして、全部青山にしてしまわれた」[34] と報じられ、「筑紫から」植林をはじめたとある。これを信ずれば、スサノヲ一行は対馬から、北九州へ渡って、日本へ帰ってきたことになる。

### （３）スサノヲ親子の植林事業

案の定、対馬にスサノヲ一行が立ち寄った記録が残っている。

対馬には、那須加美乃金子神社が同じ社名で２社（志多賀・小鹿）あるが、いずれの社伝[35] にも、スサノヲが五十猛を率いて八十木種をもって、韓地には植えず、この山に植えて、島民の入山を禁止したとある。

スサノヲ一行は、対馬から玄界灘を渡って、博多湾ではなく、有明海から筑紫に上陸したようである。なぜ、西側の有明海へ回り込んだのか、その理由はわからない。

有明海に面した稲佐神社（佐賀県杵島郡白石町）に、五十猛とその姉妹がやってきて杵島山（当時

は島であったという）に樹種を播き、植林をして、杵島山一帯を青き山とされたという伝承が残っている[36]。稲佐神社の祭神は、天神、五十猛、女神とある。スサノヲと五十猛、大屋津姫のことであろう。この小高い山は、現在は「稲佐の森」と呼ばれて、山全体が公園化されている。また、稲佐神社の北４㎞の所に妻山神社があり、妹・抓津姫とその夫と思われる抓津彦が祀られている[37]。

両神社の社伝によれば、五十猛とその姉妹は、この後、杵島山の杉、樟などの発芽を見てから旅立ったという。杵島山から湾岸に沿って西へ（小城－神埼（吉野ヶ里）－鳥栖）約70㎞行くと、基山がある。その山麓に荒穂神社があり、五十猛が祀られている。社伝によると[38]、基山の東に山道を通る人たちの半数を殺す悪神たちが住んでいたが、そこを通りかかった五十猛が悪神たちを退治したという。

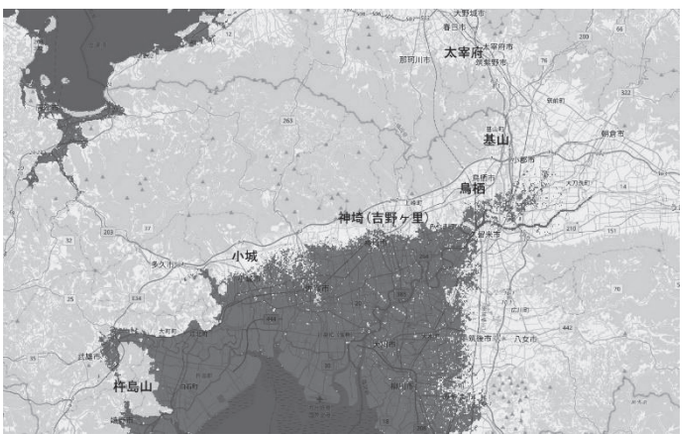


**図２　杵島山－小城－神埼（吉野ヶ里）－鳥栖－基山－太宰府**
**（「Flood Maps on your Web-Site」[39] により海抜５mに設定）**

基山から北へ進み、山と山に挟まれた渓谷（今の太宰府）を通り抜けると現在の博多湾に出る。一行は、博多から日本海沿いに進み、日本の国中に樹種を播いてまわったのであろう。

スサノヲ一行は、筑紫（博多湾）から東へ進んで行き、石見の五十猛（磯竹）に逗留したことが伝承されている。

大田市五十猛にある五十猛神社や韓神新羅神社の社伝によれば[40]、半島から帰国したスサノヲと五十猛、大屋津姫、抓津姫の父子は石見の大浦湾に上陸し、この地にしばらく留まり、宮を造られたという。そのため、この地は「五十猛」と名づけられた。父のスサノヲは大浦（韓神新羅神社）に留まり、息子の五十猛は湊（五十猛神社）に留まって造林を指導されたという。大屋津姫と抓津姫の姉妹は、「神別れ坂」で父神と分かれて、２㎞ほど南の山麓の地（大屋姫命神社）で機織りと造林を指導したと伝えられている。それゆえ、この地は「大屋村」と名づけられたという[41]。

２人の姉妹は、さらに隠岐の島に渡って植林開発をおこなったことがわかっている。抓津姫の鎮座した地を姫の名にちなんで「都万（つま）村」と名づけ、土地の人たちが天健金草神社（あまたけかなかやじんじゃ）を建てて２人を祀っている[42]。

その後、（伊賀多気神社の略記によれば）スサノヲと五十猛の２人は、大屋姫、抓津姫と別れて、故郷の出雲に上り、先述した「八岐大蛇の退治」を行って、この地に植林と製鉄をもたらした。そして、スサノヲはこの地に宮（須我神社）を造って本格的に国づくりをはじめた。

大蛇退治の後、息子の五十猛は、石見で大屋津姫、抓津姫と合流して、さらに日本海沿いに東の方向へ進んでいった。

詳細は不明だが、丹後半島の宮津湾に面した木積（こづみ）神社[43]、佐渡島の度津（わたつ）神社[44]、さらに佐渡島の向かい側、新潟県の弥彦山に弥彦（いやひこ）神社[45]があり、いずれにも五十猛または別名の大屋彦が祀られている。（五十猛を祖神とする出雲族の国土開発の跡かもしれないが。）

最後には、五十猛は２人の姉妹とともに木の国（紀伊国）へ行かれ、伊太祁曽（現在の和歌山市）に拠点をおいて国土開発した[46]。

### （４）スサノヲと宇佐

スサノヲの娘御子のなかに、多紀理姫、市寸島姫、田寸津姫の宗像三女神がいることは先述した。宗像大社の辺津宮に市寸島（市杵島）姫、中津宮に田寸津姫（湍津）、沖津宮に多紀理（田心）姫が祀られている。宗像市の辺津宮（宗像大社）から中津宮（筑前大島）、沖津宮（沖ノ島）を線で結ぶと、その先は新羅の釜山につながる。三女神は日本と朝鮮半島とを結ぶ航海の守護神（海の航海のために

天候・風向・海流を予言する女神）だった。そして、『日本書紀』によれば、この三女神はもともと宗像の島々に移される前に宇佐神宮に降臨していたと記されている[47]。

宇佐神宮の現在の祭神は、八幡大神（応神天皇）、比売大神（多岐津姫・市杵嶋姫・多紀理姫）、神功皇后の三神となっている。不思議なことだが、全国４万４千社ある八幡宮の総本社であるのだが、宇佐神宮の主祭神は、八幡大神ではなく、『古事記』『日本書紀』にあるとおり、比売大神（ひめおおかみ）であり、宗像三女神であるとされている。

宇佐神宮とは宇佐氏の祖神が祀られている社である。宇佐氏の祖神とは、すでに見たように、宗像三女神である。そうだとすると、応神天皇はいったい宗像三女神とどういう関係があるのだろうか？神宮皇后は応神天皇の母親だが、宗像三女神と何の関係があるのだろうか？

そして、八幡神は応神天皇とされているが、もともと誰だったのだろうか？　八幡神について、『古事記』にも『日本書紀』にも、どこにも記載がない。比売大神と並ぶ神なのだから、比売大神と因縁の深い神だったはずである。

もしも、比売大神＝宗像三女神だとするならば、宗像三女神と因縁の深い神とは、三女神が「うけい」によって生まれたとされるかぎり、その因縁の由来であるスサノヲをおいて他にいないのではないか？　それにしても、「比売大神」とは、何と謎めいた表記なのだろうか？

スサノヲ一族について神社伝承にもとづいて探査した労作、小椋一葉『消された覇王』は、八幡神＝スサノヲ、比売大神＝アマテラスと推理している。「奈良の春日大社の第四殿に比売神が祀られているが、……どうやらアマテラスは、昔は比売大神とも呼ばれ、伊勢神宮は比売大神宮ともいっていたようである」[48]。小椋一葉氏は、さらに宇佐神宮に奉仕した氏神は宇佐氏と辛嶋氏だが、それぞれの系図を調べたところ、宇佐氏の祖先はアマテラスの３人の姫神であり、辛嶋氏の祖神はスサノヲと記されていることを突きとめた。それゆえ、「八幡神＝スサノヲ、比売大神＝アマテラスと見なすのが、自然だと思う」[49] と結論している。

このこと（宇佐神宮の祭神＝スサノヲ・アマテラス）が何を意味するのかといえば、スサノヲとアマテラスの「うけい」は宇佐が舞台だったのではないかというのが、小椋一葉氏の推論である。スサノヲは出雲の国づくりを整備したあと、朝鮮半島との海路を抑えるために九州に侵攻したと推論する。九州にはイザナギ、イザナミとその娘・アマテラスがいた。イザナギはスサノヲに降伏し、娘アマテラスとの政略結婚を受け入れて、出雲の支配下に入った。イザナギの妃イザナミは人質としてスサノヲとともに出雲へ連れ去られ、最後には出雲で亡くなった[50]。その遺骸は、『古事記』によれば、現在の安来市比婆山に葬られたという。

この戦乱を、記紀は「うけい」神話として物語った。スサノヲがアマテラスのいる高天原へ挨拶に行こうとしたところ、アマテラスはスサノヲの暴虐を警戒して、武装姿でもってスサノヲを迎えた。戦乱にはならなかったが、「うけい」という形で政略結婚し御子を産んだ。スサノヲの３人の姫はアマテラスのもとに宇佐で育てられ、やがて宗像の島々に鎮座した。その後、出雲の王位が継承されて、大国主が王位につくと、宗像のタギリ姫が大国主の妃になり、筑紫は引きつづき出雲の支配下に入った。これが、小椋一葉氏が推理する歴史的文脈である[51]。（ちなみに、アマテラス＝スサノヲの現地妻説、タギリ姫＝大国主の現地妻説は、もとをさかのぼれば原田常治『古代日本正史』（1976 年）が最初にとなえた説であることを付記しておこう[52]。）

原田常治も小椋一葉氏も、「邪馬台国」は九州の日向（宮崎県西都原）にあったと考えている。九州にあった邪馬台国が、出雲を併合して、その後さらに畿内・大和へ東遷して大和政権になったというストーリーである。私も、そう思っている（ただし、同じ九州でも日向（宮崎）ではないかもしれないと思っている）。その後、小椋一葉『消された覇王』が出てから 20 年、原田常治『古代日本正史』が出てから 45 年が経っているが、邪馬台国がどこにあったのか、その論争はいまだに決着がついていない。

**≪注≫**

1）鳥取県立むきばんだ史跡公園パンフレット「妻木晩田遺跡」/（Web）「大山王国ホームページ」～「佐古和枝【特集・妻木晩田遺跡】古代ロマンにせまる」/ 濱田竜彦『日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田遺跡』、新泉社、2016 年。

2）森浩一『日本神話の考古学』、朝日文庫、1999 年、135 頁。

3）安本美典『日本の建国』、勉誠出版、2020 年、152-153 頁。安本美典によれば、大和朝廷を開いた神武天皇の活躍時期は 278～286 年頃と推定している。また、天照大御神＝卑弥呼は 247 年または 248 年に没したとしている。

4）(Web)「firetree.net」～「Flood Maps on your Web-Site」(http://blog.firetree.net/2007/02/06/flood-maps-on-your-web-site/)。Flood Maps の海抜を 5m に設定した地図である。弥生時代の海岸線を推測している。

5）梅原猛『葬られた王朝』、新潮社、2010 年、22 頁。

6）三浦佑之『出雲神話論』、講談社、2019 年、578 頁。

7）『古事記』（上）、次田真幸訳、講談社学術文庫、1977 年、97-99 頁。

8）（Web)「出雲お社倶楽部」～「伊賀多気神社とオロチ神話」(https://www2.izumo- net.ne.jp/oyashiro/cat68/cat128/)。

9）（Web)「出雲お社倶楽部」～「韓竈神社と岩船」(https://www2.izumo-net.ne.jp/oyashiro/izumo/cat115/)。

10）(Web)「出雲神話とゆかりの地」～「斐伊神社」(https://www.izumo-shinwa.com/spot_dtl_hiijinjya.html)。

11）(Web)「出雲の神様に会いに行こう！～出雲国風土記探訪～」～「久武社（久武神社）」(https://www.guutara-teisyu-izumofudoki.com/2021/06/izumofudoki-kumujinJya.html)。

12）『古事記』（上）、次田真幸訳、講談社学術文庫、1977 年、99 頁。

13）(Web)「日本初之宮・須我神社」(https://suga-jinja.or.jp/)。

14）(Web)「神社人」～「八坂神社」(https://jinjajin.jp/modules/newdb/detail.php?id=96)。

15）(Web)「伊太祁曽神社」(https://itakiso-jinja.net/)。

16）出雲の北方にある山を「宇迦の山」という。スサノヲが大国主にスセリ姫との結婚を認めたときに「宇迦の山のふもとに宮殿を作って住め」(『古事記』（上）119 頁）と言った、その「宇迦の山」である。御子神の 1 人、宇迦之御魂という名はこの山の名に由来していると考えられる。スサノヲは若い時に、この山の主峰「熊成峯」にしばしば登っている。注 26）を参照されたい。

17）『古事記』（上）、次田真幸訳、講談社学術文庫、1977 年、105 頁。

18）『出雲国風土記』、萩原千鶴訳、講談社学術文庫、1999 年、225 頁。

19）(Web)「玄松子の記憶」～「那賣佐神社」(https://www.genbu.net/data/izumo/namesa_title.htm)。

20）『日本書紀』（上）、宇治谷孟訳、講談社学術文庫、1988 年、49-51 頁。

21）『出雲国風土記』、51、92、93、144、225 頁。

22）『古事記』（上）、81 頁。

23）『古事記』（上）、135 頁。米子に宗形神社（鳥取県米子市宗像 298）があり、三女神が日本海沿いに船でこの地に上陸されたという伝承がある。(Web)「米子市ホームページ」~「お船塚」(http://www.city.yonago.lg.jp/9667.htm)。

24）『先代旧事本紀』、安本美典監修、志村裕子訳、批評社、2013 年、209 頁。

25）古代出雲王国研究会『山陰の古事記～謎解き旅ガイド』、今井書店、2010 年、30 頁 /(Web)「古代史の復元」～「素戔嗚尊の父フツ」(http://mb1527.thick.jp/N3-02futu.htm）/（Web)「古代史探訪」～「布都御魂」(https://enkieden. exblog.jp/26193830/)。

26）(Web)「山陰の元気印」～「日韓丸木舟航海プロジェクト・からむし会・代表森泰さん（松江市）【#連載 98】」(http://genki.sanin-navi.jp/5093.html)。

27）(Web)「玄松子の記憶」～「来阪神社」(https://www.genbu.net/ data/ izumo/kisaka_title.htm)。神社の由緒に、「当鼻高山は宇迦山の主峯にして、古来熊成峰と称して居る。社前に素盞嗚尊の御腰掛岩がある。古来

氏子民人の崇敬厚く、国主武将の崇敬も厚かった」とある。

28)『日本書紀』（上）、51 頁。

29)『日本書紀』（上）、49－50 頁。

30）長野正孝『古代史の謎は「海路」で解ける』、PHP 文庫、2021 年、26-32 頁。

31）(Web)「人文研究見聞録」～「須佐とスサノオ〔山口県〕」（https://cultural-experience.blogspot.com/2015/10/blog-post_54.html）/ (Web)「日本の歴史と日本人のルーツ」～「萩市須佐、須佐之男命が立ち寄られた所」（https://ameblo.jp/shimonose9m/entry-12030845668.html）。

32）(Web)吉田薫「スサノオの来たみちを探る－出雲～韓国の景観と航海」（http://peshimane.net/wp/wp-content/uploads/2017/01/2016-28）/ 長野正孝『古代史の謎「海路」で解ける』、145－146 頁。

33）長野正孝『古代史の謎は「海路」で解ける』、54 頁。

34)『日本書紀』（上）、49－50 頁。

35）(Web)「shrine-heritager」～「那須加美乃金子神社（対馬小鹿）」(https://shrineheritager.com/nasukaminokaneko-shrine/）/ (Web)「延喜式神社の調査」～「那須加美乃金子神社(対馬志多賀)」(http://engishiki.org/ tusima/bun/tsm700108-02.h tml)。

36）(Web)「九州の神社」～「佐賀県・稲佐神社（白石町）」（http://kyushu-jinja. com/saga/inasa-jinja/）。社伝によると、五十猛が日本へ最初に上陸した地は有明海に面したこの杵島山であると記されている。この社伝を信ずれば、新羅から南下して対馬、壱岐、さらに（博多へ東進せず）西へ進んで北松浦半島、さらに南下して長崎半島、そして島原半島を回り込んで佐賀市白石に上陸するというルートである。海流に沿って、たまたま杵島山に流れ着いたというわけではない。なぜ、わざわざ肥前（佐賀）へ行かなければならなかったのだろうか？

37）(Web)「大屋毘古神・五十猛命ホームページ」～「妻山神社」（http://www.kamnavi.jp/it/tukusi/tumayama.htm）。

38）(Web)「玄松子の記憶」～「荒穂神社」（https:// genbu.net/data/hizen/araho_title.htm）。

39）注４）に同じ。

40）(Web)「大屋毘古神・五十猛命ホームページ」～「五十猛神社（いそたけ）」（http://kamnavi.jp/it/izumo/zitake.htm）/ 同上ホームページ～「韓神新羅神社」（http://kamnavi.jp/it/izumo/index.htm#zkara）。

41）(Web)「大屋毘古神・五十猛命ホームページ」～「大屋姫命神社」（http://kamnavi.Jp/it/izumo/i ndex.htm #zooya）。

42) (Web)「玄松子の記憶」～「天健金草神社」(https:// www.genbu.net/data/oki/amatakekanakaya_title.htm)。

43）(Web)「かみながらのみち～天地悠久～」～「木積神社（与謝野町）」（https://ameblo.jp/keith4862/entry-12492667111.html）。

44）(Web)「玄松子の記憶」～「渡津神社」（https:// www.genbu.net/data/sado/watatu_title.htm）。

45）(Web)「玄松子の記憶」～「彌彦神社」（https://www. genbu.net/ data/etigo/iyahiko_title.htm）。

46) 陸上交通路のない弥生時代に、日本海側から紀伊国へ、どのようなルートで渡ったのだろうか？　『古事記』にも、八十神に迫害された青年・大国主が、紀伊国の大屋彦（五十猛）のもとを訪ねてかくまわれたと記されている。いったい、大国主はどのようなルートで出雲から紀伊（和歌山）へ渡ったのだろうか？　後にスサノヲを祀る熊野本宮大社は、海に面した新宮から内陸へ向けて熊野川を約 35 ㎞北上した山中にある。出雲の熊野人が、国土開拓のために紀伊国・熊野へ移住したのだ。和歌山も新宮も海沿いの地だから、出雲からは舟で行ったのであろう。しかし、舟でどう行けるのだろうか？　無謀な空想かもしれないが、伯耆・米子の日野川から高梁川へ、あるいは倉吉の天神川から吉井川へ抜ける舟曳路があったのではないだろうか？　舟を曳いて分水嶺を越え、別の川に移って南下して、山陽側（吉備）へ抜けて、そこから瀬戸内海を渡って、紀伊国へ行ったというコースである。そういえば、スサノヲが高天原から奥出雲の斐伊川上流の鳥髪山（船通山）に降りたと『古事記』は語っているが、スサノヲは文字通り舟を曳いて船通山を越えて来たのではなかったか？

47)『日本書紀』（上）、39 頁。

48）小椋一葉『消された覇王』、河出文庫、2005 年、264 頁。

49）小椋一葉『消された覇王』、264 頁。
50）小椋一葉『消された覇王』、137 頁。
51）小椋一葉『消された覇王』、265-268 頁。
52）小椋一葉『消された覇王』、429-430 頁。小椋一葉『消された覇王』の「あとがき」に、原田常治の功績を称える文章が記されている。「文中に記す場所もなく過ぎてしまったのが、原田常治著『古代日本正史』、『上代日本正史』である。歴史から消されたニギハヤヒを甦らせた点など、多くの示唆を含むこの書は、私の研究の動機となり、飛躍台となった。」